

類では、朝鮮の文化を吸収していった。武
 器、服飾が最も真を輸入されたつや、身を束
 縛する足に履き足る。自來と朝鮮大名達の
 度期は軍事面での技術や戦術などの変化
 時期であった。現代の我々がイメージ
 する韓国武術の装いが誕生するものこ
 らで、後に安土・桃山文化と呼ばれる
 名たちの戦争が大きく影響を及ぼし
 められる。

今回の軍装想像では水鉢末・元龜期の上洛初期の姿と晩年、天正八年・十年に掛けてその総頂期の頃の姿の二点を描いた。ここからは信長の軍装を通じてこれらの時代的特徴を迫ってみた。先ずは今回の足半の件に近い上洛前後の若き姿より紹介しよう。

信長の甲冑は、本能寺の変後に織田家が没落したため、
銅丸は稲佐川の戦いで、

鬼は総腹輪の筋型。建勢神社伝来の組系威
 儀形の中央の威立に織田木瓜の家紋を立



興元及び大和に上り藤原に頼られた人物藤原の山鹿を都として振興、これを多摩に転出させ、自ら山鹿を用いた上杉製法の生産でとし、足利は都賀山鹿より多摩産として贈答に送った。

て、大船に
三耳はその
44

[illegible]

信長が關つたといふ時代的特徴に合致し、恐らく威色目が遡う程度に同様の甲冑を着用させた姿で描かれた。

研出殻（けんしゅつがら）を占める。紫で段威として多色を用いている。この駒丸を形作る（こね）

肩衣袴姿の上級武士

[illegible]

には永く常盤の

織田信長の足半

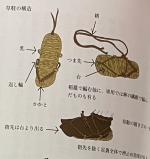


「戦足に足半履き」は戦
 足半と草鞋の違ひ、使い分けはどうだろうか。
 戦足は足半履きで、古くは「戦足に足半履き」は戦
 足半と草鞋の違ひ、使い分けはどうだろうか。
 戦足は足半履きで、古くは「戦足に足半履き」は戦
 足半と草鞋の違ひ、使い分けはどうだろうか。

草鞋は足の甲、足首に緒を交差させる事で草鞋の台と足裏全体
 を固定して着脱する。その着脱方から足裏全体で踏ん張りが効
 きそうだが、そういう違いは有りそうだが、足半がスパイクな草
 鞋はスパイクシューズ、冬山登山に必須のアイゼンと言ふよう
 が、実際、少ななつたが現代でも南河内の金剛山へ御来山
 に訪れる方には、草鞋を履いて登って来られる方は存続し、山
 事が見えてくる。



秋夜長物図巻に登場する
 足袋に足半を履いた武士武者



素直に読むなら信長は足半を愛用していたのかも知れない。そして足半は貴人
 の面でも必要が無い点を考慮すれば、足裏を負傷した金松を心から労わ
 る、信長の優しさが表れたエピソードとも取れよう。
 他に山岳部など地形による差、地域別、又は軍中など重閉単位での違いなどは
 想像する。だが、時代の変化、豊臣という中央政權の下、様々な環境の戦場
 にでも流し、草鞋に自分が有った可能性などが考えられる。

織田信長の人物とその甲冑軍装

さて、ここからは毎度お馴染みの軍装を想像してみたい。織田信長とは何者か、南蛮船に身を包み現代的な価値観と
 強いリーダーシップで、古い体制や秩序の破壊を進め近世へ時代を動かす役割を担いながら、志半ばにして本能寺に
 関する一革命児。それが戦後、昭和の高度成長期からの評価だった。その高度成長期も既に終わりに成り、成熟期の近世
 研究が進んでその評価は見直され、その人物像も大きく揺れ動いている。代表的な映像作品の大河ドラマでは主人公

織田信長の足半

織田信長の足半



織田信長軍装想像図